

避暑地としての北京西山八大処：1862～1868年

# 避暑地としての北京西山八大処： 1862～1868年<sup>1</sup>

— 駐北京英使館の全権公使と公使館員による最初期滞在を中心として —

## A Study on the Patachu<sup>2</sup> as the Summer Resort for the Early British Residents in Beijing

宮澤 眞一

MIYAZAWA Shinichi

In Beijing almost every summer in the 1860s saw groups of residents coming up to the Western Hills (八大処西山: the Patachu); most of them were foreign diplomats, their families and attachés. American and British missionaries, their families and colleagues used to haunt there as well. All of them wanted to escape, as they said, the summer heat, the dust, the mosquitos and the squalor of the city. Up to 1900 the eight temples, Patachu, of the Hills had become a summer resort for diplomats like Sir Rutherford Alcock, a retreat for intellectuals like S. Wells Williams, and a sanatorium for ill-healthened missionaries like Mrs. Bridgman. In this paper I should like to focus on the very initiation and early years of the summer resort, particularly using the writings, published and unpublished, of the British diplomats and attachés.

### 1. 北京西山の遠望

百五十年ほど前の清末北京。こんもりと茂る樹木の梢を通し、落日に染まる小高い山並みが見え隠れする。その紫色の静かな佇まいは、北西の方向に北京郊外を縁取るかのように、北京に在住する市民に、昔も今も安心感を与え、一日の終わりを告げる。ビルの谷間を歩きながらの今日では、どこにいて見上げても、変わらぬ西山の山影が見える。

夕焼けのなかで眺めたら紫色に見えるのに、西山に接近するについて、それほど緑の多くない岩肌が視界に入ってくるようである。裸山だ、とはなんだか外国人訪問者によって、実際に使われてきた表現の一つなのである。最初にそんな印象の一つを英国人旅行家・地質学者ラファエル・パンフリーの回想録から引用しておくのも無駄ではないであろう。

To the west [of Beijing], over some ten or twelve miles of intervening country, arise the barren mountains which form the western limit of the great delta plain, and the transition from the lowlands of the coast to the elevated plateau of Central Asia<sup>3</sup>.

北京西山は、遠くヒマラヤに至る山岳地帯の始まり、山際にあたるのであり、同時にゴビ砂漠に淵源する北方の砂漠化は、その触手の先端を伸ばしている場所でもある。

英国政府による最初の外交使節の任務が、1792年、マッカートニー卿（Lord George Macartney：1737～1806）に与えられた。中国から英国に帰国するのは、1794年になったが、旅先の出来事を日々に細かく書き留めている。天津到着は1793年8月11日日曜朝である。大型帆船による沿岸での海上輸送、天津からの小型ヨットによる運河と、輸送手段を換えながらも、いずれにせよ水路による旅は、陸路による長旅と比べたら快適な旅程を想像したくなる。しかし、夏場は夏場なのであり、暑さに変わらないし、雨が少ない。東洋に特有する猛暑の苦痛から逃れられるものではないのである。

一つの悩みの種は、蚊であった。もう一つは、食材の劣化であった。

1793年8月12日の記述は、天津から北京に向かう運河の快適なはずの船上にありながらも、最初の被害を次のように述べる。

We are much troubled with mosquitoes, or gnats, and other insects, among which is a phatana or moth of a most gigantic size, no less than a humming-bird, and we are stunned day and night by the noise of a sort of cicada who lodges in the hedgy banks and is very obstreperous.<sup>4</sup>

最初の英国使節を夏場に悩ませた蚊の攻撃と対策は、後述するように、1860年代の北京在住欧米人にとっても共通する問題となる。もう一つの猛暑被害は食材の劣化であり、翌日8月13日の記述には次のように見える。

Some of the provisions which were brought for us this morning being found tainted (which was not to be wondered at, considering the extreme heat of the weather, Fahrenheit's thermometer being at 88), the superintending Mandarins were instantly deprived of their buttons, and their servants bamboozed, before we knew nothing of the matter. So sudden and summary is the administration of justice here.<sup>5</sup>

不慣れな東洋特有の猛暑に悩まされながら、北京に近づくにつれて、北西の方向に霞む西山遠望をできた。8月15日、マッカートニーの口調は一変して明るくなった。これまでの旅のあいだ、海岸線を辿るか、大河か運河を使ってきただけに、河川の流域に広大に延びる平坦な地面ばかりが視界に入った。どこまで進んでも平らに見え、起伏の少ない風景に飽きてきていた。そんなときに英国人の眼底に初めて印象された北京西山の姿は、清々しく映り、その後につづく英米の北京訪問者が、繰り返しエルするほどの安堵感を伴った。北京は近い。それに青い山並みの遠望は、緑の茂みや清流の涼しさを意味したからである。

We now observe with pleasure some picturesque blue mountains at thirty or forty miles distance. They contribute a good deal to enliven our prospects, which have hitherto been confined to the level uniformity of the circumjacent country.<sup>6</sup>

使節一行の初日の滞在先に予定されていた場所は、北京城内になく、一行は、そのまま西山の方角に向かって進んでいく。北京から北西に約十キロほど離れた圓明園が、宿舎として用意されていた。英語では **The Summer Palace** と呼ばれる夏宮であり、そこは文字通り、夏場の北京猛暑を避ける別荘庭園という趣や利用法があったらしい。圓明園から二十キロあまり、更に山道を左手に辿れば西山に入るし、別の右手の山道は香山温泉に通じる。

久方振りの西洋人の到着、それも英国からの使節である。宗派は異なるものの、同じ白人として、北京に長年暮らしてきたカトリック教会僧侶たちの訪問を次々に受ける運びとなった。北京政府からマッカートニー使節との交渉係を命じられていた。ポルトガル、フランス、イタリア出身のジェスイット派やオーガスト派所属の宣教師たちである。8月23日の訪問者として、**Joseph-Bernard d'Almeida** 以下の面々の名前を記している。

Joseph-Bernard d'Almeida [1728~1805; astronomer], André Rodrigues [1729~96; the president of the Board of Mathematics] and another Portuguese; Louis

de Poirot [1735~1814 ; painter and linguist], Joseph Panzi [1733~1812 ; painter] and Peter Adeonato [d.?~1822 ; watchmaker and interpreter], Italians ; Joseph Paris [1738~1804 ; watchmaker], a Frenchman and or two others.<sup>7</sup>

圓明園に数日滞在したあと、マッカートニー卿の入京は、8月26日に実現した。三時間ほどの旅程の後に辿りついた北京城内の宿舎には、内庭の数だけで十一を数え、広い屋敷が当てられていた。広々していて通風も良かったらしく、夏場の暑さや空気に関する苦情を述べていない。

マッカートニー卿の日記は、なんども出版を計画されながら、実現したのは最近のことになる。それに対して余りに対照的に思えるのは、使節団に同行したストーントン卿 (Sir George Staunton) による遠征記である。使節の終了直後、1797年にロンドンで出版され、長く親しまれてきたためである。<sup>8</sup>

両者は文体の上でも違っている。書き手の性格上の違いが手伝っているのであろうか。高潔の人 (“a man of strong principles and firm character”)<sup>9</sup> と言われるマッカートニー卿は、重要な公職に任命されても、私益を肥やすことが一切なかったという。それに、日記と遠征記とでは、もともと叙述の構え方に、差異を生じる性格のものである。感情をおさえながらも、私的な関心や観察を淡々と述べる口調は、マッカートニーの日記の方に色濃く読み取れそうだ。ストーントンの方が、記録的で一般的な、乾いた書き方をしているものの、北京城内宿舎の詳しい叙述に、かえって効果的に発揮されていると思われる。

Through the interference of the Governor of the palace of Yuen-min-yuen, the embassy removed to Peking immediately. Here the whole was lodged in a large palace, consisting of several buildings, built by a former collector of the customs at Canton, who raised an immense fortune by extortions on the English ; and in consequence of oppressing the natives in another office, the edifice was seized by the crown.

It was built in the usual manner of the houses of the great Mandarins, and the whole was in the form of a long square, surrounded by a brick wall, the surface of which was a mere blank, except near one of the angles, where there was a gateway. This wall supported the top ridge of roofs, the lower edges of which resting on an inner wall, parallel to the first, composed a range of buildings divided into offices. In the other part of the inclosure were quadrangular courts of different sizes. In each of these were buildings, on platforms, of granite, surrounded by a colonnade.<sup>10</sup>

北京特有の四合院造りである。これだけの詳しさはマッカートニーにない。後者は単に、この

立派な屋敷を一步出たら、狭い通りの胡同（futon）に囲まれた街並みがある、とだけ述べるに止まっている。猛暑下の北京生活、そのなかでも、降雨のあとに残される泥道、汚れたたまり水、そのほかの不便さとか非衛生の面については、マッカートニーにもストーントンにも触れられておらず、後の使節や滞在者による記述を待たなければならない。

ストーントン卿は息子連れで初回北京遠征に参加していた。同じジョージ・ストーントンと呼んでいるけれど、父親のミドルネームが、レオナードであり、この Sir George Leonard Staunton は、英国東印度会社の幹部役員として広東に勤務するあいだに、中国語と中国文化に通じていた。使節団では正使につぐ副使の重責を担った。息子のミドルネームの方は、トーマスといい、若い George Thomas Staunton は、遠征隊の仲間から“young Staunton”と呼ばれ、マッカートニーの給仕役として参加していたが、通訳の手助けをするくらいにまで、中国語の知識を多少とも持ち合わせていた。使節団の帰国後は広東にとどまり、在広東の英国東印度会社の通訳として中国語に熟達するようになった。後年の1807年8月6日金曜日の夕方、澳門でストーントンを初めて訪問したロバート・モリソン（Robert Morrison： 1782～1834）は、ロンドン宣教師會から中国に派遣された第一号の宣教師であった。中国語に熟達した現地の先輩として、新来者に対して、現地情報を伝え、最初から援助を惜しまなかった人物は、同じジョージ・ストーントンでも、こちらの息子の方なのだ。

## 2. 第二次英国使節アムハースト卿と通訳ストーントンによる圓明園到着

英国政府は、初回のマッカートニー使節派遣で期待した大きな成果をあげられなかったことから、第二回目の使節団を送ることとし、アムハースト卿に託した。広東に在住してきた息子の方のストーントンは、使節通訳の依頼を受け、約二十年振りの北京再訪の幸運をつかむ。会社や広東の仲間たちに次のように別れの挨拶を送っている。

My public service abroad terminated with Lord Amherst's embassy. Having held the highest place in... the service of the East India Company to which I was attached ; having accomplished my favorite object, of revisiting Peking in a diplomatic capacity ; and having accumulated a competent fortune... I gladly abandoned the prospect of increased wealth... and I rejoiced to find myself able to terminate the period of my banishment, at the early age of six and thirty.<sup>11</sup>

アマーハースト卿使節団の帰国後、息子ストーントンは、上掲引用文のなかで自ら期待していたように、英国に戻って英国議会の議員となる。中国通として英国政府の中国政策を大いに批判した。また、ロンドン王立アジア協会の設立に尽力して、たとえば自分の書齋から多くの中国関係書籍を寄贈し、同協会図書室の蔵書を充実させている。先を急ぎ過ぎたようである。ここでアマーハーストによる入京についての言及を済ませておかなければならない。

再び夏場の圓明園が舞台となる。それにしても、なんという予期せぬ悲劇が、そこで演じられたことであろう。1860年の大惨事を予兆するような出来事が、アマーハーストに起きた。

1816年8月28日の早朝6時30分に、中国皇帝は、謁見のために訪れるはずの使節一行を待っていた。早朝の6時半という一日の仕事始めの時間は、皇帝によるお勤め開始の通常時刻であって、この場合に驚くことではない。使節一行の到着が少し遅れているとの通知を受けた皇帝は、面会を延期した。丁度その決断の時刻には、大慌てのアマーハーストが、正面の門に到着していて、乗物から転がり落ちたばかりの所であった。なにしろ昨夜は徹夜で旅路を急いできたために、寝不足であった上に、洗面とか着替えする間取りの余裕がなく、玄関先での転倒によって英国紳士の帽子も凹んでいる始末。汚れきった哀れな使節の姿を迎えたのは、皇帝以外の重役たちばかりであり、皇帝の姿はなかった。

北京滞在が許されず、せっかく英国から運んできた荷物の紐を緩める暇もなく、使節一行は退去を命じられた。徹夜のあとの激しい疲労と空腹に耐えて、帰路につこうという落胆の段階。思いがけず皇帝からの豊富な食事の差し入れがあった。一行の喜びはこの上なかった。圓明園に十時間滞在しただけで、夕方の四時までに使節一行は、帰路につき、完全に不毛に終わった。このときに良い成果を恵まれたのは、帰国後に議員となるストーントン一人であったかも知れない。

われわれの期待する北京、圓明園、それに西山に関するアマーハースト使節団の印象記を見かけないのは、短時間に終始した使節の失敗に起因するためと言えるのであろうか。

### 3. エルギン卿特使による入京

英国政府による前後二回の使節派遣は、こうして結果的に全て不毛に終わった。使節派遣を計画する背後には、増加する中国茶の輸入の必要性和、その支払いに当てるインド産鴉片輸出のバランス問題が潜んでいる。ジャーディン・マセソン商會を代表格として成長著しい広東の英国系個人商人、それに彼らを後押しする英国東印度会社と英国政府は、鴉片禁圧の政策を厳守したい

中国政府とのあいだに、対立構造を深化させていく。皇帝から派遣された欽差大臣の林則徐は、英国商人の輸入した阿片を没収したうえに焼却する事件が起きた。第一次鴉片戦争の勃発であり、勝利する英国政府は、1842年、中国政府とのあいだに南京条約を結んだ。

敗戦処理のために南京条約を結び、それにその後、英国側から逐一履行の要求を受けるものの、中国事情は、すんなりと条約項目を実行に移せないでいた。条約上の難題には、外国人による広東市内の自由往来のほかに、全権公使の北京駐在という外交課題（「公使駐京問題」<sup>12</sup>）があった。

鴉片戦争のあとに再び、英国軍と中国軍とが、戦火を交えるようになった直接の原因は、1856年10月8日に勃発したアロー号事件である。しかし事件背後には、条約の完全履行問題と英国商人の利権拡大が潜んでいたと言える。事件の発展は、広東十三行街に設置されていた外国系商館や、市内の外国人住宅等への放火と広東大火災、その被害に対する賠償要求に起因する英仏連合軍の北京侵攻作戦、と随伴する中立国の露国と米国、これら四カ国による天津条約と璦琿条約の交渉と調印にまで進んだ。いわゆる第二次鴉片戦争の戦火が、1860年の夏には北京にまで迫る勢いとなった。

われわれの関心の的にある北京西山が、こうして英国人の眼前に姿を現す。1860年夏場の圓明園は、再び歴史的な舞台となった。このときの滞在者は皇帝自身である。すでに引用したカメロンの歴史物語には、つぎのような描写がある。

In the year 1860 the late summer in Peking was a fine one. The worst of the humid heat and the drenching showers that made nonsense of the drainage system were dying out. Another weeks and it would be autumn.... But in the fine late summer of 1860 it was generally known that the emperor was not in Peking but at the Summer Palace outside the city, with, among others, the concubine Yi ; and that he was in some apprehension for his own safety.<sup>13</sup>

強力な武装と多数の兵士を投入して、外国軍が、首都北京に迫りつつあるという大事なときに、病臥していた咸丰帝は、一時的に圓明園に滞在したあと、更に北方の Jehol（熱河：rèhé）に避難するものの、間もなく同地で他界する運命にあった。

天津から北京を目指し侵攻する英仏連合軍は、皇帝の避難先と聞く圓明園に向かって進んだ。10月7日朝、連合軍は、圓明園を攻め込み手中に収める。皇帝や重臣たちはすでに逃亡していて、貴重な骨董品や豊富な宝物だけを残し、園内は蛻の殻の状態にあった。

圓明園襲撃劇の背景には、皇帝の避難先だけでなく、もう一つの重大な要因があった。このと

きから数週間前の出来事に関連する。中国側との交渉役に派遣されていたハリー・パークスや、エルギン卿の私設秘書ヘンリー・B・ロッチ等英国側と、それに仏国側にも、思いがけない逮捕と投獄という悲運が、通州で発生していた。9月18日に投獄された英国側の二十六名のうち、圓明園まで連行されて虐待されるものがあると危惧された。実際に、英国側では死者が半数に達した。ロンドン・タイムズの特派員にしても虐殺された一人である。仏国側にしても変わらない。十三名の投獄者のうち、生還できたのは、わずか五名だけだった。チャールス・ギュツラフやオルコックの庇護のもとに広東・澳門・アモイ・上海で暮らすあいだに、中国語に堪能になったパークスはともかくとして、中国語のできないロックが、幽閉された牢屋のなかで、中国人罪人との同居を余儀なくされ、いかにして生き延びるか日々刻々に思案し工夫するために、彼の持ち前の才気を十分に発揮したようである。そのサバイバル劇を後年の回想録に綴っているが、この通州投獄中の生活に関するかぎり、これ以上に生々しい記録はほかに見当たらない。<sup>14</sup> 投獄されていると思われる同国人たちの救出が、圓明園襲撃の重大な目的の一つになった。

後述するパークスは、すでに北京まで連れて行かれ、圓明園で救出できなかった。このときの一連の動きは、エルギンの記録に次のように記されることになる。特に、占拠につづいて起きる更に一連の動き、略奪・放火・破壊、についての背景知識を提供していると思われる。

Sunday, October 7th.---- We hear this morning that the French and our cavalry have captured the Summer Palace of the Emperor. All the big-wigs have fled, nothing remains but a portion of the household. We are told that prisoners are all in Pekin... Five P.M.--- I have just returned from the Summer Palace.

It is really a fine thing, like an English park---numberless buildings with handsome rooms, and filled with Chinese curios, and handsome clocks, bronzes, &c. But, alas! such a scene of desolation. The French General came up full of protestations. He had prevented looting in order that all the plunder might be divided between the armies, &c. &c. there was not a room that I saw in which half the things had not been taken away or broken to pieces. I tried to get a regiment of ours sent to guard the place, and then sell the things by auction; but it is difficult to get things done by system in such a case, so some officers are left who are to fill two or three carts with treasures which are to be sold...

Plundering and devastating a place like this is bad enough, but what is much worse is the waste and breakage. Out of 1,000,000l. worth property, I daresay 50,000l. will not be realized. French soldiers were destroying in every way the most beautiful silks, breaking the jade ornaments and porcelain, &c. War is hateful business. The more one sees of it, the more one destests it.<sup>15</sup>



ハリー・パークス監督官は、アロー号事件後に制圧した広東の管理運営を一任され、重要な立場にあった使節のエルギン卿に懇願されて断れず、渋々、今回の北京遠征に通訳として参加したという特殊事情にあった。エルギン卿のお気に入りであるばかりか、右腕として有能な働きをしてきただけに、エルギン卿としては、彼を失うわけにいかず、救出に全力を尽くして成功する。エルギン卿による10月9日付書簡には、パークスが、前日10月8日に帰還したと記す次のような文面が見える。

October 9th.--- Yesterday at 4 P.M., Parkes, Loch, and one of Fane's Irregulars arrived... Parkes and Loch were very badly treated for the first ten days ; since then, conciliation has been the order of the day, and, I have no doubt, because I stood firm. If I had wavered, they would have been lost... Parkes and Loch have behaved very well under circumstances of great danger. The narrative of their adventures is very interesting...<sup>16</sup>

エルギン卿は、憤怒する感情と報復心を抑えながらも、英国人不当逮捕の再発防止のために、対抗処置や処罰の方法をアレコレと考えるが、結局、皇帝の潜伏先と噂され、それに投獄と虐待の場所と聞く圓明園の破壊を手段の一つに選んだわけである。

Camp near Pekin.----- October 14th.----- We have dreadful news respecting the fate of some of our captured friends. It is an atrocious crime, and, not for vengeance, but future security, ought to be severely dealt with.<sup>17</sup>

圓明園の誇る「大量金玉珍宝」<sup>18</sup>を略奪したのにつづき、10月18日には、園内の二百棟以上を数える建造物を焼却せよ、というエルギン卿の命令が通達された。ホープ・グラント將軍率いる英軍は、圓明園に火を放った。<sup>19</sup> こうして先行した二回の英国使節が訪れた夏宮の圓明園は、一気に灰塵と歸して、かつて中国皇帝お抱えのカトリック系僧侶や彫刻家の設計建造した石柱の廃虚だけが、今に榮華の名残を伝えるだけである。

#### 4. FOREIGNERS WITHIN THE GATE<sup>20</sup>：駐北京外国使館の設置

ローレンス・オリファントの著したエルギン卿使節による中国・日本遠征記は、1857～1859

年を扱っており、これまで見てきた1860年の北京進攻に触れることなく終わっている。<sup>21</sup> 同じことは、フランス皇帝の派遣したグロス使節に関する同一テーマ、中国・日本遠征記についても言える。<sup>22</sup> 更に、中立国の米国政府が派遣した全権公使の使節に随行した後述する美国使館の通訳・書記官ウィリアムズ (S. Wells Williams: 1812~84) の北京遠征記もまた、1857~1859年を扱うのみである。<sup>23</sup> したがって資料的には、ここで再び、エルギン卿の前出日記書簡集に戻るほかない。

圓明園の破壊につづき、10月24日に北京に入ったエルギン卿は、これまでの相互の論争点に決着をつけて、北京協約を結ぶと同時に、天津条約を批准した。交渉の相手は、道光皇帝の第六子にあたる進歩派の恭親王 (Prince Kung) であり、こうした交渉過程のなかから、やがて外務省に発展する中国最初の外務窓口役所 (Tsung-li Yamên) が誕生する。このときに確認した事項をまとめて、英語では Convention (協約) と呼んでいるが、前出の夏笠の研究書七章では、「北京条約」という表現を使って論じ、外国軍の軍事的強圧に屈した中国の近代史に於ける「重大屈辱の一頁」と述べている。<sup>24</sup> フランス使節グロス男爵も、翌日に北京城内に入り、英国使節と同様の手続きを速やかにすませている。

各条約締結国の求める在北京外交代表部の設置交渉については、マイケル・J・モーザー (Michael J. Moser) と娘 (Yeone Wei-chih Moser) による郷土史的な調査をまとめた『北京城内の外国人』に詳しい。副題として「北京の外国公使館」が付いている。香港のオックスフォード大学出版が、1993年に出版した百五十頁あまりの父と娘による珍しい共著本であり、おそらく北京研究とか、中国の外交関係史とか、いずれの研究分野であるにせよ、われわれの日頃手にする学術書の文献リストには載りそうにない性格の一冊と思われる。学術的でなくアマチュア的に受け取られがちでありながら、学術研究のヒントとか最初の手掛かりを与えてくれるこの種の資料や読み物は、毎日の新聞記事に似て、それなりに興味深く読めるだけでなく、貴重な情報源となりうる。

モーザー親子によれば、最初に提案された設置場所は、放火して焼き放った圓明園跡地であったという。北京城内に外国人の居住を認めたくないとする中国政府側の本心が感じられて、条約国はこの提案を拒絶する。<sup>25</sup> そこで次に提案されたのが、崇文門近くに位置している東交民巷 (“Dongjiaomin Xiang or ‘Eastern Lane of the Mingling of Peoples’”<sup>26</sup> である。最終的にそこに決まった。その名前の通り、交易のために諸民族の集まる場所として栄えてきており、安南、ビルマ、朝鮮、モンゴール等の王室から貢物を携えて毎年訪れる使節のために、宿泊先の迎賓館 (Siyiguan) も用意されていた。北京城内にあって古くから、最も外国人を迎えるのに慣れて

いた場所と言えた。すぐ横を走る城壁の上部の道路は、高さ15メートル、11メートルの幅があり、後年の若いアーネスト・サトウ（Ernest Satow）のように、乗馬や散歩を楽しむのに十分な広さと眺めを備えていた。

外交使館街（Legation Quarter）のうち、英国政府は、梁公府（宗室奕棟梁住宅<sup>27</sup>）を借りることになり、1900年迄40年余り、中国の正月になると、馬車仕立ての賑々しさを、500ポンドの借地料を近く中国外務省まで届けたそうである。<sup>28</sup> その後も英国政府は、周囲の土地を借り受け、使館の敷地を広げていくが、書記官用の快適な住居まで新築している。フランスもまた元満州貴族の屋敷（原景公府）を借り受けたが、古い建物を壊してフランス・スタイルの使館を新築することとなる。

東交民巷のなかで一番乗りしていたのが、ロシア使館であろう。すでに1727年からロシア正教の牧師と中国語見習いの小集団が、東交民巷のモンゴール街に居住を許されていて、1858年の天津条約締結後には、彼らが別の場所に移り、跡地にロシア使館が設置された。

ロシア使館と道を挟み、向かい側、もともと貢国使者の迎賓館があった跡地に、米国使館が設置されることになる。1エーカーの広さがあった。この土地購入の資金調達や交渉、それに使館の改築計画は、通訳書記官のS・ウェルズ・ウィアムズが担当した。前出の夏笠によれば、ウィリアムズ担当の米国使館が、「中国首都出現了第一此外国使館」<sup>29</sup> であるという。

## 5. 八大処とハリー・パークス

すでに二度にわたって派遣され、英国使節が味わった夏場の北京については、暑さと蚊の被害に触れた。実際に北京の使館で暮らすようになる1861年の夏から、北京在住を許された公使館員と宣教師たちは、どのようにして慣れない異郷の地で夏場を過ごそうとしたのであろうか。短期間に終始する使節訪問ではなくて、その後は、一年、二年、十年、二十年と住み続けるあいだに、猛暑と蚊に加えて、後述するように、黄砂や埃、泥道、不衛生、伝染病等についての悩みが、日記や書簡に追加されるようになる。

二巻本のオルコック伝記を書き残しているアレクサンダー・ミッチーは、主として上海在住の長い、有能なインテリ商人であったが、北京在住の外国人にとってやがて必要となる夏場の避暑地もしくは保養地としての北京西山八大処について、以下のような興味深い総括的記述を残している。その意味でもミッチーは貴重な存在であると言える。また、長文の引用文になってしまう

けれど、避暑地確保の交渉を記した唯一の資料であるので、当該個所を以下に文引用しておきたい。

The lives of the foreign residents were by no means confined within the four walls of the city. The environs without fences or trespass notices made charming excursion grounds for riding parties. For longer expeditions there are the never-failing attractions of the Ming Tombs, the Great Wall, the passes into the Mongolia, and the various other distant points. The city is beautifully situated in the centre of a mountain crescent, whose nearest point is thirteen miles distant. The first object of quest when the Legations had been established was a sanatorium [保養地] or summer retreat [避暑地]---the thermometer reaches 100° Fahr in June---and the Western Hills [西山] were explored. Some of the most beautiful spots there were occupied by Buddhist temples or monasteries, whose builders have shown as nice a taste in the selection of their sites as their brethren the monks of the West have always done. These religious houses, laid out with a view to the accommodation of pilgrims and strangers are regularly used by Chinese grandees as health-resorts or shelters from political storms. The Russian mission, while it was alone in Peking, had set the example twenty years before of resorting to the hills temples in the dog-days. Arrangements with the priests for the occupation of certain portions of the temples were soon made by Mr Parkes, who was on a visit to the capital, and ever since official Peking, with one notable exception, has on the approach of summer migrated bodily from the oppressive atmosphere of the great city to the exhilarating air of the Western Hills. The social life of the city was reproduced at the temples, but in a less conventional form, every one residing there being considered on a holiday. The country round offered many temptations to excursions, and amateurs of geology, botany, and natural history were never at a loss for something to interest them in their rambles among the hills. Residence so far from town brought the foreigners into friendly contact also with their rustic neighbours, whose innate good qualities, moderation, contentment, and kindliness were displayed in a very favorable light.

But the sojourn at the hills also brought the foreigner into occasional contact with Chinese of higher rank, who welcomed such opportunities of showing civility to the strangers. At other times disagreeable collisions with the retainers of a great personage were experienced. So popular were the temples of the Western Hills as a summer resort that they were always full, and consequently disputes about accommodation were liable to occur, especially when some grasping priest would let the same premises to two different occupants, leaving them, or rather their servants, to fight for the possession.<sup>30</sup>

すでに上記したように、北京城内に20年も前から駐在員を派遣できてきたのが、ロシア帝国

であったように、北京郊外の避暑地確保も、ロシア使節が一番乗りしていたらしい。ロシアの先例に従って夏場避暑地の確保に向けた交渉をパークスに託した、とミッチーは述べている。北京に上洛した1860年秋の間に、早々と交渉したものと思われる。エルギン卿使節から駐在北京全権公使を引き継ぐことになる弟のブルース卿（Frederick William Adolphus Bruce）が、外務大臣格の恭親王に引き合わされた日、1860年11月8日の通訳はパークスであった。翌日には上海へ向かうエルギン卿一行に同行するパークスが、北京に戻ってくる日は、1861年4月に入ってからとなり、しばらく書記官・通訳の役職に就任した。ブルースや英国使館の八大処使用が、1861年の夏場からであるから、書記官就任後の初仕事として、恭親王と中国外交部役人との交渉をするのには十分な時間的余裕を感じる。

パークスの1861年北京使館滞在は、しかしながら、4月から5月末までの短期間に終始した。一つにはブルース初めとする英使館の面々が、彼のような真剣さを感じさせない、とする失望感に起因するようである。

The Legation struck him as badly managed, the establishment 'dirty and ill dressed,' and whole effect 'mean.' The duties of the Chinese Secretary did not attract him, and he was not sorry that he had not to perform them. In spite of the interest he took in riding about Peking and the neighbourhood, he was glad to leave. If he stayed in China it was for work, not amusement.<sup>31</sup>

旅先から妻に宛てて消息をたえず書き送るパークスは、この点で前出ウィリアムズによく似ている。すでに北京を発って、上海経由で広東に戻る旅先にあった6月1日の妻宛書簡のなかで、植物採集の趣味について述べたときに、二度にわたる北京八大処探訪に言及している。

At Peking, too, we have a vegetation that is much akin to our own, and many wild flowers also. I went twice to hills about twelve miles from the city, and derived as much delight from this particular, as from the charm of the general view. The blue iris is a very common flower, and in the place of cowslips we have oxlips, a flower of the same character but a brownish hue instead of bright yellow. Dandelions and thistles are plentiful, but I discovered nothing like a daisy or buttercup, for which I would have given any money.<sup>32</sup>

鷹の眼のような鋭い視線を肖像写真に残りしており、行動する領事として強い意志力を感じさせてきたパークスが、このように名もないような雑草に興味を持っていたり、妻に自分の発見を

たえず私信で語り伝えようとする優しさの一面を持ち合わせている人柄であることが分かる。二度の八大処探訪の合間、1861年5月あたりが、実際の使用許可を得た時期と推定してよいであろう。

## 6. ブルース卿および日本語通訳見習アーネスト・サトウ：1862年

上掲引用文でミッチーの指摘している英国全権公使と駐北京英使館員による1861年八大処滞在について、実際の滞在に触れた英文資料を発見できていない。ここでは1862年から1868年までの資料に限定せざるをえず、年次ごとに検証しておきたい。

ただ、1861年滞在については、ミッチー著オルコック伝記と、レイン・プール著パークス伝記、これら二冊における記述以外の資料がないけれど、ブルースの滞在はほぼ推定できそうである。

1862年夏場には、同じブルースと駐北京英国使館員による滞在が、アーネスト・サトウの自筆未刊日記で、以下のように言及されている。

Fri. 27. [June, 1862]

This morning ten of us on horseback & Murray in a cart, with three other carts containing boys & grooms started at 5 o'clock for Pi Yun Sze [碧雲寺] or the Jasper-cloud Monastery situated in the hills; [blank space] miles from the Ping Chi Men in a [blank space] direction. The road led us thro[ugh] Palichwang, & about a mile beyond, turns off by the side of an almost dry stream, flanked on one side by a continuous mound. After proceeding along this for some distance, the road divided into two a bridge affording to one branch the means of crossing the streambed, while the other still continued along the bank. Taking the left, over the bridge, we got into rather a bad road, but still cantered on, passing thro[ugh] a village, till we came to a shaded enclosure with tombs & memorial tablets. Here we waited for the carts, & when they arrived turned to the N [orth]. Up to this time I had fancied that we were going to Patachu, but from the slight knowledge I had gained fr[om] the map I soon perceived myself to be mistaken. Mr. Bruce having rented the temple at Patachu, & sent things up there, we did not consider that we had any right to intrude there, & so the destination of our excursion was changed.<sup>33</sup>

ブルース全権公使が、八大処に八つある寺院の一つ、碧雲寺を借り受けており、ベッド等の家具を荷馬車で送りこんでいる、とサトウは述べている。元気で若々しい通訳見習生のサトウの方は、乗馬好きであり、方々に遠出しているけれど、1862年6月末の頃までに噂で聞いていたと思

われる八大処を目的地にして乗馬で向かったものらしい。

他方、早くから北京入りを果たしていたロシア、それに英国とフランスにつづき、公使館設置の最後に廻ってしまった駐北京美国使館の方は、もっぱらウィリアムズが、公使館用地の確保と建築に余念がなかった。公使館に入居できるまでのあいだ、フランス使館の好意によって、そこに仮住まいをしている頃、ウィリアムズは、澳門で待機している妻に宛てた1862年8月7日の書簡のなかで、次のような事情を伝えている。

We are still living at the French Legation, but Mr. Burl[ingame] intends to going up to the Hills to relieve Kleczkowski of some of us for a few weeks, while I stay to look after the repairs ; however, I think B. will never go there, he is too inert. As soon the house is habitable, I shall leave, if I am alive & well, and go south [to Macau]. I have every inducement to hurry the workmen therefore. The cholera is nearly gone, and all foreigners have been spared, of whom there are 80 in Peking.<sup>34</sup>

上掲引用文でウィリアムズの言うように、1862年夏場の北京には、すでに八十名の外国人が暮らしているとしたら、そのなかのどれほどの人数が、八大処へ向かったのであろうか。避暑地らしい賑わいが予想される人数に違いないのである。

## 7. ラファエル・パンペリーと駐北京外交官の交流：1863年

旅行家のパンペリーは、世界各地の地質調査をつづけながら、1862年になると日本に現れる。横浜、東海道、北海道まで探訪の足を伸ばした。その後1863年に入り、上海から北京まで旅を続けた。北京の手前で遠望した西山八大処の印象は、そのときに記したものであろう。彼の回想録には正確な日付が記入されておらず、いつ北京に到着したかも正確に判明しない。1863年の春先であろうと推測するのみである。「北京に於けるアンソン・バーリングゲーム夫妻と娘、1863年」というキャプションのある庭先の写真が、掲載されていたり、北京滞在中は、バーリングゲームの好意を受けて、美国使館に宿を得たと感謝しているところから判断して、1863年春先の到着というのが適切であるようだ。

その後に、本稿テーマに関連する興味深い記録を読むことができる。バーリングゲーム夫妻に加えて、英国全権公使ブルースと英使館付文官・武官たち一行に案内されるままに、西山八大処ま

での遠出に参加している。国柄の違いを超えた外交官達の異郷に於ける社交の具体例が、早くも1863年夏場のこの時点で見受けられるのである。

On one excursion to this temple our party included Mr. and Mrs. Burlingame, Sir Frederick Bruce, and several of his attaches. Our way lay at first along the outer side of the city wall. I was riding in advance with some others when we saw a number of pigs ahead of us and many crows all fighting over something which we soon saw was human leg sticking up out of the land. We fell back and managed to surround Mrs. Burlingame and prevent her from seeing the horrid sight.<sup>35</sup>

## 8. 八大処社交界の賑わい：1864年

前出のウィリアムズは、前後10回、八大処で避暑をしている、と自ら記しているが、1864年夏がその初回であったと思われる。白松で知られる長安寺で過ごした。八大処の八寺院のなかでも、一番下手の大きな寺である。後年には三山庵をすっかり気に入ってしまい最良にした。

弟の宣教師フレデリックに宛てた1864年8月12日付書簡に於いて、各国の公使たちが、それぞれ八大処の好きな寺院を選んで、夏場を過ごしていることが分かる。

We are spending a month or two at a temple about 14 miles W. of Peking, situated at the base of the Hills, which commence the plateau of central Asia. It forms one of a group of eight separate monasteries cared for by 20 priests or more in all, and in the lowest down; the Russian, Am. & French ministers occupy others higher up the hill, embosomed in groves of trees and affording extensive views of the plain toward Peking. Ours is spacious & clear, but not so new as some of the others; it contains three terraces within the wall, & has 8 or 10 different buildings altogether arranged around two courtyards that contain many trees...

Among the trees in the compound, are six specimens of the white pine, of which is, I am told, over 500 years old; this tree is covered with a white bark nearby in the outmost branches, as white as if the whole trunk had been white washed like the bit I send you; the bark flakes off like the shellark hickory, & this keeps the tree constantly white, and fresh. It is truly a fine tree, & has been introduced into England & France, where I am inclined to think it will not show such a white trunk, because of the humid climate compared to this.<sup>36</sup>



1864年夏の段階に於いて、英国、ロシア、米国、フランスの各国全権公使が、八大処に勢ぞろいしていることが分かる。どのような交流を相互に持ったからについては、この書簡に語られていないが、家族や若い公使館員ぐるみで、相互のあいだに社交の機会が、年々、増えて行き緊密になったものと推測できる状態にある。

この引用文に白松のことをウィリアムズが詳しく伝えているのは、彼の植物採集の趣味に基づいてのことである。1864年夏、八大処の山野を探索しては、北京蕨や他の幾つかの新種(*Sambucus Williamsii* と *Panicum Williamsi*) を発見するまでに発展した。<sup>37</sup> 十年前にペリー提督に伴い、通訳として日本に遠征したときにも、余暇に下田の山を歩き回って、植物採集に夢中なウィリアムズの姿が、今度は、北京の八大処の山野で見かけるようになったわけである。1854年4月20日下田では、新種 *Clementis Williamsi* を採集したほどの専門家並みの研究熱を感じされる。以下に引用するミッドフォードが、アマチュアの植物学者について言及しているのも、こうしたウィリアムズの実在と実績を念頭に置いてのことと思われる。

## 9. ミットフォードの八大処滞在記録：1865～1866年

1865年夏場の資料を提供するのは、ミットフォード (A. B. Freeman-Mitford) である。文才に恵まれた青年貴族であり、駐北京英使館付文官として赴任するために、1865年4月に香港に到着して以来1866年9月まで、香港・広東・北京というように推移する滞在先から本国に宛てて、長文の私信29通を書いている。後年にそれらを編集して一種の紀行記にまとめた。八大処発信の書簡は、全部で三通あり、書簡7号 *Pi Yün Ssü* 発信1865年7月7日付<sup>38</sup>、書簡27号 *Ta-chio-Ssü* 発信1866年7月23日付<sup>39</sup> と、書簡28号 *Ta-chio-Ssü* 発信1866年8月4日付<sup>40</sup> である。

発信地の寺院は二ヶ所になり、内容的にも大きな違いを見せている。二番目に書かれている1866年7月23日付書簡は、モンゴール紀行を主な内容にしていて、本稿のテーマとの資料的関わりでは、単に発信地だけに限られている。最初の第7号書簡は、1865年に最初に滞在したときに書かれており、当然のことながら、資料的な内容は、八大処滞在の理由と魅力、滞在先の寺院の生活環境、近くに滞在するロシア使館員との交友に詳しく伝えてようとしているので、先に引用したミッチーの概括的記述を裏書きした形である。なかでも「北京西山の小高い山並みは、中国北部のスイスである」という一言に、好印象を集約している文章、それら数ヶ所からの抜粋にここでも限定せざるを得ない。

You will see by the date of this that we have beaten a retreat from the dust, head and filth of the city, and that our “villegiatura” has begun. Indeed, Peking was becoming insupportable. The thermometer when we left was standing at 108° in the shade, the highest degree when it has reached for these three years, and I was heartily glad to turn my back upon the Legation gates.

The plain between these hills and the town is very beautiful. It is thickly studded with farmsteads, knolls of trees, and tombs, which are always the prettiest spots in China, for as a balance between against the dirt and squalor in which they pass their lives, the Chinese choose the most romantic and delightful places for their final habitations. The soil is wonderfully fertile, and yields two crops in the year, so that usually the plain bears every appearance of prosperity ...

The hills west of Peking are the Switzerland of Northern China. They are not very high nor extraordinarily beautiful, but they are some very pretty gorges and valleys, richly wooded, and at any rate the air is fresh and pure. Every gorge has a perfect nest of temples, built by the pious emperors of the Ming dynasty and the earlier Tartars, for which good deeds the Corps diplomatique at Peking cannot be too grateful. Properly speaking, according to the rules of their order, the Buddhist monks are forbidden to receive any money for the hospitality which they offer to strangers, so when the Chinese go to stay at a temple they restore or beautify some part of it as a return ; but we prefer paying a few dollars, and in spite of their statutes the arrangement seems to suit the monks as well as it does us....

Our temple is called “Pi Yün Ssü,” “the temple of the azure clouds,” a romantic name, and certainly the place is worthy of it. It is built on terraces ascending the hill to a length of about half a mile, and on every terrace is shrine, each more beautiful (if that is the proper word to apply to the grotesque buildings of this country) than the last.... At the top is a small temple more in the Indian than the Chinese style, and here there is a very curious idols with ten heads, three large ones at the bottom, from which three smaller ones spring, in their turn carrying three lesser ones surmounted by a single very small head. The hands are in proportion. This little place commands a panoramatic view over the plain, with the walls and towers of Peking in the distance....

Our habitation consists of several little houses on one side of the temple ; we dine on an open pavilion, surrounded by a pond and artificial rockery, with ferns and mosses in profusion ; high trees shade it from the sun, and close by us a cold fountain pours out of the rock into the pond, in which we can ice our wine to perfection....

We rise at any hour after daybreak, breakfast at eight, dine at three ; after dinner we go for a walk, or a scramble over the mountain, and come home to tea at about eight or nine. We sit smoking our cheroots for perhaps an hour, talking always about home and watching the fire-flies, that, according to the Chinese

tradition, served as lamps to Confucius and his disciples. A visit from or to the Russian Legation, who have got a temple at about an hour and a half's ride from here, is the only break to the monotony of our daily life. I have my teacher with me here, and work with him at the language from breakfast to dinner; that is my serious occupation, and about as hard a task as one could wish for. I carry about my lessons for the rest of the day written on paper fans---a capital dodge for keeping one's work before one. We are rather bothered by mosquitoes, and a most venomous little insect called the sand-fly, yellow in colour, and smaller than a midge, which is lucky, for if he were of the size of a blue-bottle I should think his bite would be fatal...<sup>41</sup>

夏場北京の生活環境的苦痛として、猛暑と蚊が、これまでの訪問者によって指摘されていたが、ここでは新たに、砂塵とむさ苦しさ（“dirt and squalor”）が追加されており、訪問者と違って長期の滞在者の眼に、夏の北京は生活困難と映ったようである。それと比較して、谷川と緑に囲まれた八大処の空気は新鮮に感じられたものらしい。

ミットフードの書簡では、むさ苦しさを詳述していない。後で引用する他の北京滞在者の文章でも短く語られているにすぎないので、ここでは最も端的に表現している1890年代の旅行者ヘンリー・ノーマンの観察を以下に引用しておくのも無駄ではないであろう。

Above all the characteristics of Peking one thing stands out in horrible prominence. Not to mention it would be willfully to omit the most striking feature of the place. I mean its filth. It is the most horribly and indescribably filthy place that can be imagined. Indeed, imagination must fall far short of the fact. Some of the daily sights of the pedestrians in Peking could hardly be more than hinted at by one man to another in the disinfecting atmosphere of a smoking room. There is no sewer or cesspool, public or private, but the street; the dog, the pig and the fowl---in sickening succession---are the scavengers; every now and then you pass a man who goes along tossing the most loathsome of refuse into an open-work basket on his back; the smells are simply awful; the city is one colossal and uncleansed cloaca.<sup>42</sup>

翌年の1866年には別の寺院に滞在したことがわかる。1866年8月4日付の書簡においては、再び八大処で過ごすつもりでのミットフードは、1866年の2月に予約をした、とわざわざ記すほどに避暑地としての人気が上がってきたようである。二年目であるから、八大処の各寺院の持つメリットについて熟知する立場になったためか、今回の選択は、社交の賑わいを避けるために、他の寺院からかなり離れた場所を考慮した上での決断だったらしい。

When I returned from Mongolia three weeks ago I found that all the world, that is to say, the three or four diplomats who compose our world, had very wisely taken itself off to the country. So early as last February I had secured this "Temple of Great Repose," and I lost no time in coming out here. It is too far from Peking to be very convenient; but it is well worth the extra ride, and the advantage of being feeting miles from the other temples inhabited by Europeans is incalculable; one is not subject to perpetual interruptions by people who, being bored themselves, come in and inflict their boredom upon others. It is a great undertaking moving out to the hills. We are obliged to take absolutely our whole ménage, and almost all our furniture with us. I think you would have laughed at my procession; there were fourteen carts full of every kind of movable---our whole poultry-yard clucking and cackling out of coops and baskets, and a cow with her calf. This must seem strange to you, who would certainly not dream of taking your hens, ducks, and cows with you from town to the country; it is only another instance of the universal topsy-turviness of things in China, again demonstrated by the fact that the farer one gets from town the dearer everything becomes, there being no market and no competition, so that the owner of a leg of mutton can just charge what he pleases for it, knowing that you must either buy at his price or go without it altogether. It is a beautiful tide out here, past Hai Tien, a little village with a small inn at which the Pekinese may be seen by scores, naked to the waist, and enjoying an outing, after their fashion, with chopsticks and rice, tea and infinitesimal pipes, past Yuen Ming Yuen and Wan Shao Shan, or rather its ruins, past flourishing cornfields and picturesque hamlets, past temples and shrines innumerable, along stony roads which the rains have turned into canals so deep that the carters are obliged to cast lots for which shall strip his very dirty body and go in to see whether the carts can pass or not. It was quite dark before I reached the temple, after eight hours' ride under the hottest sun I ever remember to have felt. Indeed I had a sad proof of its strength the next day, for my brown pony, Ho-o'-my thumb, who carried me so well over so many hundred miles, died of sunstroke after a few hours' illness. Poor little beast!<sup>143</sup>

上掲引用文中に語られているように、快適な避暑地の生活を確保しようとしたら、このときのミッドフォードと同じくらいに、相当大量の準備をしなければならないように思われる。料理人や使用人を伴い、まるで北京私邸の家具をみな運んでいき、引越しするような物々しさではないだろうか。14台もの荷車から編成される大行列となってしまう、しかも家具ばかりでなく、何種類もの家畜・家禽まで運んでいるから、英国国内ではとても眼に出来そうにない遊牧民の珍キャラバン光景になった。生卵を確保するために鶏を連れていく。籠に入れた数羽の鴨は、いつか鴨料理を楽しむつもりなのであろうし、日々の牛乳も欲しいので牝牛親子まで連れていく。口

لندنのマンションから田舎の屋敷に避暑に行くのに、誰が、こうした家畜・家禽の一連隊を同行されるというだろうかと述べて、英国と中国とでは、なにもかも逆さまの世界だと、ミットフォードは弁解につとめている。

## 10. 中国語通訳見習生ポーターの八大処(1)：1866年初夏

同じ年1866年の夏には、もう一人の有能な青年が、八大処の滞在と印象を家族宛書簡に記している。これらを編集して出版されたのは、書簡執筆時から百三十年後になった<sup>44</sup>。筆者のポーター (Francis Knowles Porter: 1845～1869) は、ベルハーストの有力な長老派教会牧師 (Rev. John Scott Porter) を父親に持ち、ロバート・ハート (Robert Hart) の母校でもある地元のクイーンズ・コレッジを1865年10月11日に卒業するとほぼ同時に、1865年11月2日に駐北京英使館の通訳見習生に推薦された。

乗船は1866年1月4日となった。中国に向かう船上で母親に宛てて書いた1866年1月7日日曜日の書簡に始まり、やはり母親宛に駐寧波英国領事館発信の1869年3月27日付書簡に至るまで、全書簡59通を書いている。これらの転写テキストを読むことが可能になったわけである。特に本稿のテーマにとって、貴重な資料の発掘といえる注目すべき点は、八大処発信の書簡7通を含んでいて、避暑地の生活ぶりが、随所にユーモアを交え、若々しいタッチで描写されていることにある。これだけ多数の八大処発信書簡は、前出ウィリアムズ以外に他に例をみない。

すでに上で見てきた人物や事柄に触れている興味深い記述が、随所に散見できるので、最初にそれらについて述べておこう。1866年2月21日水曜日の第11書簡には、1866年3月2日金曜日付の追伸があり、上海から天津行の乗船切符を購入できたので、日曜日3月5日に乗船予定であると知らせている。次の1866年3月20日、第12書簡にも1866年3月25日の長い追伸が付いている。この第12書簡では、駐北京英使館の発信となっていて、天津から上海までの行程を前出ミットフォードと共にした、とまず記している。更に、北京到着後ただちに全権公使の前出オルコックに挨拶に行ったところ、再婚相手の故ラウダー牧師未亡人、それに夫人の連れ子の娘と、評判の悪い息子<sup>45</sup> (日本宣教師 S・R・ブラウンの娘と結婚) を紹介されている。

ミットフォードやオルコックばかりでなく、他の公使館員との挨拶のなかで、2月、3月という早い段階でありながら、夏場の過ごし方が話題に出たように推測できる二、三の根拠を見受ける。一つには外交界の社交であろうが、北京に常駐する各国使館を実際に訪問している点にある。

駐北京使館のこうした交流は、夏場の二カ月ほどのあいだ、八大処に移るのであるから、どこかの使館での儀礼的挨拶の一つとして、早めに八大処の宿坊を予約しておいた方がよい、と助言された可能性は高い。後に見るように、実際にポッターの予約は意外に早い時期になった。

もう一つの根拠として、冬場の北京で生活を開始しながら、生活環境に関する夏場特有の悩みをはやくも伝えているからである。朝はまだ冷え込んでいるが、日中は暖かく晴れていると述べて、天気に関するかぎり満足気であるように見える。ところが、雨が少ないために、乾燥した空気は、砂塵（“the dust”<sup>46</sup>）を撒き散らす、と夏場に頻繁に語られはすの悩みが、すでにこの時期に口にされている。そればかりなく、街路の悪臭や汚物にも、この冬場の段階で言及されているのであるから、夏に入った北京で暮らそうとするなら、深刻な問題に発展しそうに予感されたことと思われる。避暑地の必要性は、こうして北京到着まぎわから話題にされ、考慮されたものと推測できる。

これまで夏場に劣化しがちな生活環境については、英国人の間の頭痛の種となった猛暑・蚊、むさ苦しさ、それに砂塵を加えて見てきたが、更に悪臭と汚物の追加を避けられないようである。“The filth and stench of the streets are most abominable and render walking in them quite impossible.”<sup>47</sup> 下水道やゴミ処理法など、近代的なシステムが、大都市に完備させるまでに、どの国も長い苦難の道を歩んできた。北京ばかりの特殊事情ではない。

八大処行きの計画が、実際に書簡で述べられるのは、次の第13書簡1866年4月11日である。

“We are all going off to the hills in the summer time to avoid the heat and the perfumes of the city, but of this more, when more is arranged.”<sup>48</sup> 八大処行きの目的を述べているが、先の3月25日付第12書簡追伸で話題にしたことを受けてのことと思われる。

次の第14書簡は、2週間後の1866年4月25日水曜日に書かれている。二、三日前の1866年4月22日土曜日に八大処へ行き、週末に二泊して北京に月曜日4月23日に戻ったと伝えた。駐北京英使館の若い会計係マリー（J. G. Murray：1842～1875）と一緒にいる。わずかな週末旅行に過ぎないのに、荷車に寝具を積み、料理担当の給仕を伴っていた。宿泊先は、上司のオルコックがすでに、この夏に滞在する予定で借り受けていた寺院であったという。

I have either a walk or a ride every day, and we have a gymnasium where we exercise in the morning at about seven o'clock ; a cold sponge bath completes the process. On Saturday last I rode out with Murray, the accountant and private Secretary, to Sir Rutherford Alcock's temple, which he has taken for the summer but has not yet occupied, so we had the whole place to ourselves. We sent our

bedding out by a cart and took our boys to cook. We stayed there all Sunday and came in on Monday morning. It was almost the only breath of fresh air ; for at this season the dust is flying and covering everything. On our way home, we passed a place called Yuen-Ming-Yuen---a summer temple or place of the Emperor which was sacked and fired by Lord Elgin some six years ago. You recollect the account of the fearful wanton havoc made by our soldiers among the costly ornaments and furniture. I am going through it next week and shall then give you an account of it.<sup>49</sup>

1866年5月8日火曜日には同日中に、父親宛の第15書簡と母親宛て第16書簡の二通を書いている。先の4月25日書簡のなかで、八大処再訪を予告した通り、同じくマリーに同行して土曜日5月5日北京を発ち、二泊三日の滞在の後、5月7日月曜日に戻ることになっていたらしい。思いがけない事故は起きるものである。同行者のマリーが、八大処に向かう途中で落馬事故を起こし、北京に戻らざるをえない深刻な事態となった。不幸中の幸いは、もともと外科出身の軍医オルコックが、治療にあたってくれた点にある。高熱を併発したために、ポーターは、三日三晩付き切りで看護した。深酒の悪癖が直らず、外交官人生を無駄に終わらせるマリーは、このときすでに、飲酒しながらの乗馬であったのかも知れず、それで落馬事故を引き起こしたとも想像できそうである。<sup>50</sup>

...but for the last three nights I have not been in bed. Murray of whom you have heard, (or rather seen) me speak, got a severe fall from his horse on Saturday, as we were all going to the temple in the hills. Sir Rutherford, who is by profession a surgeon, not a diplomat, attended to his wound (on the head) and we took it in turns, to sit up day and night to watch him, and to put cold cloths on his head to keep down his brain fever which was apprehended. He is now better and able to go about a little.<sup>51</sup>

八大処に行きたい二人の青年の勇み足という事故であったのであろう。週末宿泊が中断されてしまうことは言うまでもない。それに五月初めの北京では降雨もあって涼しく、気持ちのよい天候に恵まれたようである。夏場の滞在先を予約して、準備に余念なかったことだけは確かである。上司のオルコックとは別の寺院にした事情は、他の寺院をすでに各国の公使クラスなどの賓客による恒例滞在によって、或る意味で一年前から塞がってしまっている、という選択の余地のない盛況ぶりを物語っているかのようである。

I don't (know) that I mentioned in my last letter, that we had taken a temple for the summer months. The arrangement about payment is deferred till we leave the place, and then a present of a small sum of money is given to the head priest. There is a large hall in our temple [本堂] containing five hundred images of the mighty Buddha, in different positions.<sup>52</sup>

母親に宛てた第17書簡は、五月末の1866年5月26日土曜日に書かれていて、そこには上司のオルコックが、家族連れですでに八大処に出かけたことを伝えている。まだそれほどの暑気もなく、蚊に悩まされるのも少ない快適な生活であるので、休暇の前半組に入るつもりであったけれど、後半組の順番が来るまで北京城内で過ごすつもりであると伝えた。

Sir Rutherford and his household have removed to the temple in the hills; and we have taken a temple and at present there were two of our men out, looking after the repairing of roofs, and sweeping out of rooms, I expect to join them Monday next. I am afraid that we are going out too soon; for the violent heat and no less violent mosquitos have not yet come forth in full vigour, and we should enjoy the temple much then. We must however stay there the longer. The last fortnight has been perfectly heavenly. We have had very severe rain, almost every night and morning, and the day is so cool and fresh after it... I had intended going to the hills among the first; but the present weather is so cool here that I am inclined to stay in the city now, to escape the hot months.<sup>53</sup>

5月26日の段階では、このように快適な生活を報告しながら、数日後の1866年5月31日の第18書簡になると、生活環境に関する二つの悩みを訴えている。さすがに6月が近づいていた。一つには、むさ苦しさの点で言及した悪臭がある。更に、酷く苦しめられたのは、蚊の猛襲であったという。体中を刺されて腫れあがってしまい、中国語の勉強を中断して三日間もベッドから離れないほどの激しい痒みを味わったようだ。

For myself I am getting along well. Study of the language is progressing. I have not much amusement except what I derive from sauntering through the city, and in order to do so, it is necessary to leave at home all your sense of smell or to make use of that sense as little as you can.... I have been laid up the last three days---mosquito bites!

The cool weather suddenly disappeared; and in one night the mosquitoes appeared in swarms. I had not put up mosquito curtains, and was totally unprepared for a midnight attack I was bitten and sucked dry from head to foot.



Face, hands and legs are in a terrible state. The bites all rise in large lumps, with an almost intolerable irritation. I was in bed the whole of the day before yesterday, as my clothes irritated me so much that I could not keep them on.<sup>54</sup>

悪臭に関してはすでに引用したヘンリー・ホーマーの観察が、最も端的に表現しているのに対して、蚊の被害については、この時のポーターの体験と記述以上に、激しい苦悩を語ったものを見かけない。

## 11. 中国語通訳見習生ポーターの八大処(2)：1866年盛夏

ポーターによる八大処碧雲寺 (Pi-Yün-sü) 滞在は、7通の両親宛私信のなかで詳しく報告されているように、1866年6月末から9月中旬までの2カ月余りという長期間にわたる本格的な避暑になった。第19書簡から第25書簡に至る7通は以下のものである。母親宛6月24日、父親宛6月25日、父親宛7月8日、母親宛7月22日、母親宛8月4日および追伸8月9日、父親宛8月9日、母親宛8月19日。本稿のテーマに、こうして、豊富な資料を提供することになった。

最初の書簡6月24日には、この寺院の位置が、八大処のなかでも一番高い所にあつて、一層新鮮な空気と良好な眺めに恵まれていたと伝える。それに高所まで登ってくる他寺院の滞在者は少ないところから、社交的にやや孤立していて、中国語の勉強をしたいポーターには好都合であったようである。蚊対策のために窓や天井に、薄いガーゼ製のカーテンを張り巡らしたので、酷い被害に会わずにすんだようである。

日常生活を支えるために、身の回りの世話をする中国人給仕と料理人、それに中国語の中国人教師が同行している。八大処についてポーターの一番気に入った点はなにか。寺の脇を走る溪流には、狭いけれど或る場所に、石畳を敷いたプールが完備していたことにあつた。

The temple is situated about half-way up a very high hill to the west of the city ... Below us there is a little village where we can get our eatables to buy. The beautiful stream runs through the grounds; and at one part of its courses [sic / courses] is received into a stone-built basin where we bathe every day. There are I suppose more than one hundred different buildings in the place, which occupies a very large area. My room is the highest upon the hill, and from its position is the coolest of the lot. I got it as having the last choice; for the other men took rooms in better repairs.<sup>55</sup>

よほど避暑地としての八大処に魅了された様子であり、“As far as as I have yet seen the climate of this place suits me well in health: I wish the whole of China were healthy.”<sup>56</sup> と結論づけている。同じように快適な生活ぶりは、次の6月25日付父親宛書簡に於いても繰り返され、“My mother will let you know how I am getting on at the temple. I find it a delightful life, and shall be sorry to return again to the city”<sup>57</sup>、それ以降も滞在中の変わらない基調となる。7月22日に“Still at the temple, and enjoying its cool shade and retirement”<sup>58</sup>、更に1866年度最後の八大処発信となる8月19日書簡でも同じく、“The weather has set in quite cool and delicious; and though we could not enjoy ourselves much more than when the heat lasted, living in the Legation is endurable”<sup>59</sup> と結んでいる。

静寂のなかでの中国語習得、新鮮な空気と果物、溪流での清々しい入浴、それに同宿する若い公使館員との友情、ポーターにとっては、1866年夏の八大処行きは、事前の小旅行も手伝って好印象に終始したようである。ただ、問題は、社交の賑わいから完全には独立できなかった点にある。単なる避暑や保養のための滞在というよりも、英国の貴族階級のあいだで発達していた鉱泉地での社交習慣が、八大処にも移入されていたと指摘できそうである。

A. B. Granville 医師の英国鉱泉地探訪記 *The Spas of England*<sup>60</sup> は、1841年に発行されていて、レミントン・スバやバックストンを初めとする鉱泉水飲料の保養地が、貴族の加護によって、急速に片田舎の村からオシャレな街に変貌する過程を報告している。“There is a fragrance of aristocracy in the very air of this Spa [Buxton]...”<sup>61</sup> エルギン卿、弟ブルース卿、それにオルコック卿やミッドフォードは、高い低いの違いを見せながらも、貴族階級に属している。中国南部からの旅行者が、次々に北京を訪れるたびに、パトロン・ホスト役の立場からの接待に、八大処へ案内するオルコックたちの事情は、年々増えこそすれ減ることはなかったらしい。

During the last three weeks we have had a good many Europeans from the south up here. In the month of August., the hottest in the year at the southern parts, those who wish to escape fever and sunstroke take up a trip north, and generally end the tour by an excursion into Mongolia. The Legation and the Alcock's temple are at the disposal of all such visitors.<sup>62</sup>

ポーターの1866年八大処滞在は、満足すべきものであったらしいが、以下に見るように後二回の夏場を八大処で過ごしながらも、初回のように長期間にはならなかった。

## 12. 結びにかけて：ポーターと1867・1868年夏場の八大処

美国使館通訳・書記官の前出ウィリアムズは、10回の夏場を過ごした自ら述べているように、八大処愛好者の筆頭格的人物である。なかでも三山庵（Sa-shan-ngan）を好み、通い詰めるようになるが、ニューヨークのオリファント商会宛書簡のなかで、1867年の滞在を次のような言葉で描き出している。

We have called the old monastery, where I am spending a few weeks with my family, the Tremont Temple, because its Chinese name has that meaning, the San-shan-ngan exactly corresponding to Tremont Monastery. It forms one of eight Buddhist establishments which the devotion of former generations has left on this hillside, rising one above the other to a height of 600 or 800 ft. above the plain..... and this year & last every every available room has been taken up by foreigners, who escape the dust & heat of the city. Mr. Burlingame occupies the large one above this, & Alcock the one below, while the Spanish minister de Mas has taken another.... The few repairs needed are done usually by foreigners, and we pay something for rents besides. Altogether, the advantages of these secluded retreat are numerous, and we are happy to avail ourselves of them.<sup>63</sup>

北京に常駐する各国全権公使とその家族、それに使館の公使館員と客人が、こぞって八大処に集うようになった1866年夏場という年は、これまでにない賑わいを見せており、避暑地として発展に向かう転機の夏場と言えるであろう。

すでに上で見てきたように、オールコック、ミッドフォード、ポーター等の英使館関係者に加え、美国使館のバーリングゲーム一家とウィリアムズ一家、それに新任のスペイン全権公使まで入り、おそらくフランスとロシアの全権公使一行も、この避暑地の仲間に加わっていたはずである。宮廷外交ならぬ八大処外交が、避暑地の清々しい空気のなかに憩う家族ぐるみの付き合いのなかに、快適に展開する情景を想像したくなる。バーリングゲームを中心とするこうした日常的友好関係の形成と信頼感が、中国に対する国際協調路線の下敷きとなり、やがてバーリングゲーム条約に結実していく過程をここ八大処の夏場外交にも辿れそうに思われる。

他方、英使館の実施する現地中国語試験に備えるために、中国語の勉強に余念のない若い通訳見習生のポーターなどは、中国人の中国教師の常駐を必要としており、初回のときにも教師の同行に苦心したが、翌年1867年と翌々年1868年には、適切な中国人教師の八大処同行を断念したもののと思われる。たしかに両年ともに2週間程度は、やはり八大処で避暑しているものの、初回

のような長期間の楽しさを味わえなかったようだ。

The Peking for the time being is converted into an oven, which resembles as much anything can, the dry stifling heat of the place .... The Alcock family has gone to its temple ; rather late in the season when we have only another month of heat. I am thinking of going in September when the evenings and mornings are cooler...(Porter to Mother : Peking, 1867/07/05).<sup>64</sup>

The weather now is hot ; and I am accordingly going off to the hills this week ; in fact as the Mail is despatched. Charley Andrews is there now, and the Chief has been out for some time (Porter to Mother : Peking, 1868/08/18).<sup>65</sup>

上で言及した『英国の鉱泉水』には、1841年の発行段階で海水の医療的効果に言及して、海水浴場という新たな保養・避暑地として、リバプール近くの New Brighton の開発を伝えている。

After this account it will be readily admitted, that sea-water is in fact a mineral water to all its intents and purposes ; and that we may, therefore, look with as much confidence for beneficial effects from its employment, whether eternally or internally, provided it be judiciously recommended, as from the employment of other mineral waters---proportions to and in accordance with their respective chemical composition.<sup>66</sup>

若い中国語見習生は、中国語の現地試験に合格したあと、欠員の生じがちな沿岸開港地の領事館に、通訳として派遣される運びとなる。1867年の夏に入った北京で中国語の修得に没頭するポーターは、1867年6月15日母親に宛てて第42書簡を書いているが、そのなかで海水浴への渴望を次のような言葉で述べた。

Not that I don't like this place, but I should prefer being near the sea, especially in the summer time. The dust here is the drawback, and while I am writing it is flying in clouds as thick as a London fog ; (which I never saw!) The society here is of course much better than at any other place in China ; and good society make up even for excessive dust.<sup>67</sup>

A summer would not seem summer at all, without the sea-side.<sup>68</sup>

1841年発行の『英国の鉱泉水』が伝える鉱泉水としての海水の医療的価値、それに保養・避

暑地としての海水浴場の近代的開発という動きを思い出すとき、ポーターは時代の申し子と言えた。彼の海水浴好きが原因となり、1869年春先、赴任先の寧波付近の川で溺れて客死する。

避暑地として北京西山八大処が、いかにして出発し活用されはじめたのか、年度ごとにそれぞれの滞在者の立場を素描しながら、主として本稿では英国側資料から見てきた。本稿のテーマに関しては、すでに述べたように初期段階から10回の夏場を過ごしている米国宣教師會（ABCFM）出身の駐北京初代書記官・通訳 S・ウェルズ・ウィリアムズを省くわけにいかない。ウィリアムズの八大処滞在については、家族と主に米国人の宣教師仲間を連れ立ち、1860年代から1870年代にかけての10年余りの間、八大処滞在を満喫している点で、本稿で見てきた英国外交官の滞在の仕方や意義の点で大きな違いを示している。いずれ別稿で詳述する必要があると考えている。

#### 注

- 1 本稿は、科研費基盤研究（C）[2008年度～2010年度] の研究成果の一部として発表する。なお、本年度の夏も北京の中国国家図書館で調査している合間に、昨年2009年夏に続き博士論文作成のために杭州から上京して調査に没頭中の田力氏に、本稿の文献検索や調査のうえで、時間を割いていただき、親身な助力を得た。多謝。
- 2 In the western part of Beijing, there is a range of hills, among whose trees and dales are hidden many temples, monasteries and nunneries. In the 1860s the area became a popular summer resort for foreign representatives and their staff residing in Beijing. S. Wells Williams actually spent many summers there with his family, whose favourite nunnery was 三山庵, “Tremont Temple.”
- 3 Raphael Pumpelly: *My Reminiscences* (Henry Holt, New York, 1919, in two volumes). Vol. I, p.392.
- 4 *An Embassy to China: Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung, 1793-1794*, Edited with an Introduction and Notes by J.L. Cranmer-Byng (Longmans, London, 1962). p.82.
- 5 同上書、p.83.
- 6 同上書、pp.84-5.
- 7 同上書、p.93.
- 8 Sir George Stauton: *An Historical Account of the Embassy to the Emperor of China* (Printed and Published by G. Cawthorn, British Library, London, 1798).

- 9 Ibid., *An Embassy to China : Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung*, 1793-1794. p.22.
- 10 前掲書、p.322.
- 11 Nigel Cameron : *Barbarians and Mandarins---Thirteen Centuries of Western Travellers in China* (Oxford Univ. Press, 1970). pp.322-3.
- 12 夏笠著『第二次鴉片戦争史』(上海図書出版、2007年)。pp.60-71.
- 13 前掲書、*Barbarians and Mandarins*. pp.345-7.
- 14 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p.443. See also Henry Brougham Loch : *Personal Narrative of Occurrences during Lord Elgin's Second Embassy to China, 1860* (John Murray, London, 1870), p.178, "The gaolers and prisoners evinced great curiosity at my appearance, crowding round to examine my clothes, jack-boots, and skin. My acquaintance with Asiatic character taught me that not only my comfort while in prison would depend, but possibly my future safety, upon the position which from the first I should assume, and the deference I might be able to exact, both from my gaolers and my fellow-sufferers. My being unable to speak Chinese made me feel all the more the necessity of supplying, by my manner, my inability to communicate with them by words. When, therefore, both the officers of the prison and the convicted criminals began touching my hands, face, and hair, I at once made them understand their curiosity and familiarity were displeasing to me, and moved, as well as my chains would admit, towards a small wooden bench, the only one within the prison, on which at the time two men were seated. I mentioned hem to rise, and, to make my meaning fully understood, at the same time gently shoved them; they instantly rose, their face expressing the utmost astonishment. I seated myself on the bench, and signed that I wished the space in front of me to be kept clear.
- 15 *Letters and Journals of James, Eighth Earl of Elgin*, edited by Arthur Penryn Stanley (John Murray, London, 1872). pp.361-2.
- 16 同上書、p.362.
- 17 同上書、p.365.
- 18 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p.434.
- 19 Hosea Ballou Morse : *The International Relations of the Chinese Empire*. Vol. 1 : the Period of Conflict, 1834~1860 (Longman, Green, and Co., London, 1910). p.611.
- 20 Michael J. Moser and Yeone Wei-chih Moser : *Foreigners within the Gates---the Legations at Peking* (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1993).
- 21 Laurence Oliphant : *Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59* (William Blackwood, Edinburgh, 1859, in two volumes).
- 22 The Marquis de Moges : *Recollections of Baron Gros's Embassy to China and Japan in 1857 ~58* (Richard Griffin and Co., Glasgow, 1860).

- 23 S. Wells Williams: *JOURNAL OF VISIT TO PEKING, 1858~1859* (MS). The Yale University Library Archive.
- 24 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、pp.386~476.
- 25 前掲書、*Foreigners within the Gates---the Legations at Peking*, p.15.
- 26 同上書、p.16.
- 27 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p.456.
- 28 同上書、*Foreigners within the Gates---the Legations at Peking*, p.21.
- 29 前掲書、『第二次鴉片戦争史』、p.459.
- 30 Alexander Michie: *The Englishman in China during the Victorian Era* (Blackwood, Edinburgh, 1900, in two volumes). Vol. II, pp.154-5.
- 31 Stanley Lane-Poole: *The Life of Sir Harry Parkes* (Macmillan, London, 1894, in two volumes). Vol. I, p.442.
- 32 同上書、*The Life of Sir Harry Parkes*, vol. I, pp.442-3.
- 33 Ernest Satow Dairies PRO/30/33/15, June 27, 1862 (The National Archive, Kew Gardens, London).
- 34 SWW to wife Sarah, dated Peking 1862/08/07; SWW Family Papers (Yale Univ. Lib. Archive).
- 35 Raphael Pumpelly: *My Reminiscences* (Henry Holt, New York, 1918, in two volumes). Vol. I.
- 36 SWW to brother Frederick, dated 1864/08/12; SWW Family Papers.
- 37 Emile Bretschneider: *History of European Botanical Discoveries in China*, 2 vols. (Sampson Low, Marston Co., London, 1898). Vol. 2, p.680.
- 38 A. B. Freeman-Mitford: *The Attache at Peking* (Macmillan, London, 1900). pp.87-94.
- 39 同上書、pp.313-329.
- 40 同上書、pp.330-346.
- 41 同上書、pp.87-9.
- 42 前掲書、*Foreigners within the Gates---the Legations at Peking*, p.32.
- 43 同上書、pp.330-2
- 44 Francis Knowles Porter: *From Belfast to Peking, 1866~1869, A Young Irishman in China* (edited with an introduction by J. L. McCracken, Irish Academic Press, Dublin, 1996).
- 45 “Self-inflicted incapacity was far too common too. Drink was the usual case. ‘When a junior in China begins to go downhill’, said an 1870 Foreign Office minute, ‘debt, drink and disgrace soon hurry him to the bottom.’ Like Egan, Howlett, and Lowder, Payne and Murray were victims of the bottle.” P.D. Coates: *The China Consus, British Consular Officers, 1843*

~1943 (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1988). pp.357~8.

46 同上書、p.56.

47 同上書、p.56.

48 同上書、p.63.

49 同上書、p.64.

50 前掲書、*The China Consus, British Consular Officers, 1843~1943* (Oxford Univ. Press, Hong Kong, 1988). pp.357~8.

51 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.67.

52 同上書、p.68.

53 同上書、pp.69~72.

54 同上書、pp.74-76.

55 同上書、pp.77.

56 同上書、pp.78.

57 同上書、pp.79.

58 同上書、pp.82.

59 同上書、pp.89.

60 A. B. Granville : *The Spas of England* (Henry Colburn, London, 1841).

61 同上書、p.24.

62 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.90.

63 SWW to Olyphant, dated Tremont Temple among the Hills West of Peking, 18672/06/10 ; SWW Family Papers (Yale Univ. Lib. Archive).

64 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.119.

65 同上書、p.136.

66 前掲書、*The Spas of England* , pp.6-7.

67 前掲書、*From Belfast to Peking*. p.119.

68 同上書、p.123.